

中野香織

54 旅に墜落本、裏切りにザイル

役柄のための激ヤセ、「ベイルする」で登録、ですね。でもどうせなら単語もヤセさせて「ベイル」でいいかも。

それはそうと、敦子さんは今頃パリでしょう。飛行機の中でお読みになる本が飛行機事故のノンフィクションと伺いました。航空会社が、機内上映する映画から飛行機が危ない目にあうシーンをカットするというくらい気をつけているのに、お客様が読んでる本が墜落ものですよ(笑)。それってダイエツト中の人が『グルメガイド』読んだり、不倫中の人が『ボヴァリー夫人』読んだりするようなもの？ 自分の置かれている立場の蜜の味をより濃密にスリリングに味わわせてくれる読書っていう意味で……ちよつとちがうか。

さて墜落ものは墜落ものでも、シウラ・グランデ峰の絶壁の宙ぶらりんからはるか下方で口を開けるクレパスの中へ落っこちる……というめまいがしそうな山登り映画を見ました。「運命を分けたザイル」。

ドキュメンタリー風だけどあくまで作ったドラマ、という点が敦子さんには不服だったようですが、いや〜それでも、次々とおそいくる極限状況はリアルな迫力。

骨折してクレパスに落ちたジョーが「決



「運命を分けたザイル」2005年お正月第2弾子アトルタイムスクエアほかにて

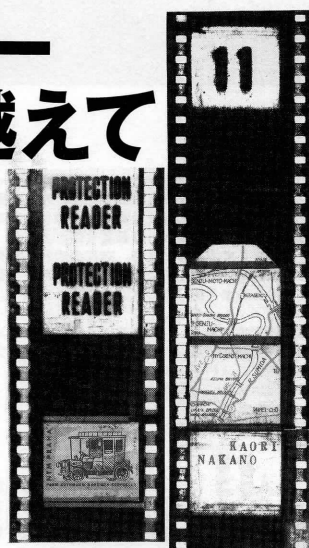
服飾史家である中野香織さんと、映画評論家で字幕翻訳家の齋藤敦子さんの往復書簡的コラム。ファッション誌の映画コラムニストとフランス映画社宣伝部員として出会った中野さんと齋藤さんは、以来十数年、友情を育む。この連載では、イギリス文化とフランス映画という専門分野をベースに映画談義が交わされる。



ドーバー 越えて

往復連載

齋藤敦子
中野香織



カット制作=井上陽子

して上って出ることではできない」と悟って「下へ降りる(一!)という究極の選択をするとか、到底たどり着けないと思う目標にいたるために、実現可能な小さな目標を積み重ねていくとか、生か死かの闘いから生まれる「処世訓」もてんこ盛りのあたり、山登り無関心層にもアピールしますね。

のどが渴ききついているときに見つけた泥水を飲むシーンなんて、シエイクスピアが似たような場面を書いていたような気がして帰って確認してみたら、『アントニーとクレオパトラ』でした。敗戦して退却する時に飢餓と闘ったアントニーが「野蛮人にもできないような我慢をして……獣でさえ吐き気を催すようなぎらぎら光る溜まり水を口にした」っていう(シーザーのセリフ)。ザイルを切られたジョーがアントニーなら、「仕方なく」ザイルを切ったサイモンは、戦いのさなかにアントニーを「見捨てた」クレオパトラでしょうか(かなり無理はあるけど)。アントニーとクレオパトラはドラマチックに死んじゃうけど、ジョーとサイモンは生きて再会し(極めつきの悪夢ですよ)、こうして淡々と当時の思いを語る……。ふたり別々に語る、というあたり、クレパス落っこちよりも怖かった。「仕方なく」単位をあげなかったために留年させるはめになったかっつての教え子などと一緒に見るとスリルが倍増しそう……。